



お忙しい中、父の葬儀に駆けつけてくださってありがとうございました。

父が大切にしていた箱に、「僕が一番気に入っている写真です」と書いた紙と2年前に平山医院に2ヶ月ほど入院しましたが、その時撮ってもらったこの写真がはいっていました。

充分長生きしたのかもしれませんが、8月9日に倒れるまで、自転車に乗るほど元気だったのを思うと、残念でしかたがありません。

熊本市出水 5-7-24 川越キヤウ子



朝刊

発行所 熊本日新聞社  
〒860-8506 熊本市世安町172  
電話(096)361-3111  
代表(096)361-3111  
©熊本日新聞社 2007

11月28日  
(水曜日)

川越寶輔氏 かねて病氣療養中のごとき、九十二年十一月十七日午前八時十分水脈いたしました。ここに生前の厚誼を深く懐んでお知らせ申し上げます。  
お通夜ならびに葬儀は左記の通り執り行います。  
一、通夜 十一月二十九日 午後六時  
一、葬儀 十一月三十日 午後三時  
熊本市本庄六丁目一九(本庄小学校正門前) 合葬殿 熊田斎場  
熊本市出水三丁目一二  
喪主 妻 長男 長女 孫 孫女  
長男 長女 孫 孫女  
ほ川 越 元  
か 越 啓  
親 族 一  
同 伸 子  
平成十九年十一月二十八日

川越 寶輔氏(かねこ え・ほつすけ)元植木町立田底中学校長。27日午前8時11分、肺炎のため熊本市の病院で死去。92歳。通夜は29日午後6時、葬儀は30日午後3時から、同市本庄6の2の9、合掌殿島田斎場で。喪主は妻元子(もとこ)さん。自宅は熊本市出水3の2の2。  
元県高野連理事長。熊本高が53年と55年の全国高校野球選手権に出場した当時の野球部長。03年勲五等瑞宝章。



朝刊

発行所 熊本日新聞社  
〒860-8506 熊本市世安町172  
電話(096)361-3111  
代表(096)361-3111  
©熊本日新聞社 2007

12月16日  
(日曜日)

川越宝輔先生の葬儀に参列 同窓生は先生の遺徳をしのいでいただきました。先びつつ、今後の母校発展を祈っていると思ひます。

恩師との別れ 遺徳をしのぶ

原田豊喜 79 元教員 (益城町)

先日、熊高時代の恩師、

どつかするとやや無理な指導などでも「ホースケさんの言いなるこつたい。しよんなかばーい」と従っていました。その指導に熊中・熊高精神は復活もし、現在の校風が引き継がれてきたことには論を待たないと思われます。  
先生は主に体育を指導されてきました。野球部長として二度の甲子園出場を果たした快挙は決して消えることなく、熊高の歴史に残ることでしょう。残された



朝刊

発行所  
熊本日新聞社  
〒860-8506 熊本市世安町172  
代表(096)361-3111  
©熊本日新聞社 2007

12月2日  
(日曜日)

「GK杯30年」という連載記事の取材で昭和57(1982)年春、川越寶輔先生を訪ねた。前年、夏の県大会の企画で、同30年の西九州大会決勝戦(延長十一回、熊高2-1熊工)の話を取材して以来の訪問だった。

先生は30年前の話をきのうの事のようによみかき話してくれた。昭和20年代、敗戦後の世の中に比例するように、多感な高校生ほどの学校でも荒れていた。球場のスタンドには応援マナーには程遠い聞くに堪えないヤジ、個人攻撃がはびこっていた。これを改めさせ、選手と応援団、学校が一体となるような場にはできないか、その思いから同28年、GK杯熊本市内高校野球大会(現在のNHK旗の前身)の実現に奔走した。

され、大会は成功した。自らが部長を務める熊高が優勝。同校は6・26大水害直後の1次、2次予選を快進撃で勝ち進み、初めて甲子園に出場する。昭和23年に野球部長就任を打診された時、大西嘉幸校長に「甲子園に出るまで辞めさせないことが条件」と言っただけで驚かせたことが現

### 川越寶輔先生を悼む

任した先生の胸心が見てとれた。県内高校野球の優秀選手賞の創設や東口杯全国選抜高校野球大会の開催、全国大会の審判員を熊本に招き、設立されたばかりの県野球審判協会の技術レベル向上に一役買うなど、果たした貢献は大きい。理事長時代は県勢が全国レ

ベルに到達する時期に重なった。昭和33年春、九州勢初のセ・パツ優勝を果たした済々黌の浪人が凱旋、沿道は20万人の人波で埋まった。あとに続く熊工ナイン。「私は群衆の陰で、ベスト4になった熊本の健康を再確認してほしい」と絶叫しておりました。

(県高野連編「白球の譜」)。学校の枠を越え、関係者に熟れた人柄を表す言葉だ。そこにあるのは「白球の友情」といえるものではなかったか。

先生はいたずら坊主がそのまま大人になったような一面があり、情に厚い人だった。プロ野球阪神で捕手として活躍した「生き証人」の川越先生をも失った。

## 「白球の友情」を信じて



故・川越寶輔氏—1993年撮影

躍した山本哲也さん(モモ)熊本市田迎町、熊工28年卒は4年前のことが忘れられない。先生は阿蘇のホテルに本人とその同級生を集め、妻を亡くした山本さんを励ます食事会を開いた。「ライバル校にいた私に」と感激は今も新鮮だ。

熊高の2度の甲子園出場をコーチとして支えた高山敏秋さん(モモ)熊本市上通町、熊高25年卒は「生徒をしかる時も当人が傷つかないよう、おだててやらせる名人だった」と言い、「先生と出会ったことは本当に幸せだった」と述懐する。

熊高野球界に三浦、中村民雄(熊工元監督)、木村茂(済々黌元監督)の各氏は既になく、今また戦後の再建に尽力した「生き証人」の川越先生をも失った。

三浦監督ら仲間と「合流」した先生が夢見るものは何か。甲子園球場のメーンポールに再び翻る熊高の校旗か、それとも、いまだ成し得ない県勢の全国選手権制覇であるうか。

ただただ、「冥福をお祈りするばかりである。(元運動部記者 萱野典世)

◇川越寶輔さん(昭和24-36年度、県高校野球連盟理事長)は11月27日、肺炎のため92歳で死去した。